

高温に対する農作物の技術対策（第2報）

令和7年6月20日
農業技術課

1 気象概況

甲府では17日に今年全国最高の38.2℃の猛暑日となり、その後も連日30℃を超える高温の日が続いています。さらに、今後2週間も高温が予想されているため、農作物への影響が心配されます。今後の気象推移に注意し、管理を徹底すると共に、熱中症にも十分に気をつけて下さい。

〈週間予報 6月20日11時発表 甲府地方気象台〉

	1週目の予報（日別）							2週目の予報（5日間平均）				
	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1
	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火
	当日								(26~30日)	(27~1日)	(28~2日)	(29~3日)
甲府 (最高気温)	32	32	29	30	28	29	30		32	31	31	31
甲府 (最低気温)	23	23	23	23	23	23	23		23	23	23	23

〈1ヶ月予報 6月12日発表 甲府地方気象台〉

気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）			
気温	関東甲信地方	向こう1か月 06/14~07/13	10 10 80
		1週目 06/14~06/20	10 10 80
		2週目 06/21~06/27	10 10 80
		3~4週目 06/28~07/11	10 30 60
降水量	関東甲信地方	向こう1か月 06/14~07/13	40 40 20
日照時間	関東甲信地方	向こう1か月 06/14~07/13	20 40 40

2 技術対策

○果樹

〈モモ〉

- ・ 高温によりモモの生育の停滞が予想されるため、地色や熟度をこまめに確認し、除袋作業を行う。
- ・ 収穫については、最高気温が35℃前後になると、着色などの成熟が遅延する傾向があるため、果実硬度2~2.5 kgを目安に適熟収穫に努める。
- ・ 日焼け果防止のため、着色期の過度な葉摘みや新梢（徒長枝）の剪除は避ける。
- ・ 反射マルチを敷く前にかん水を行う。
- ・ 反射光の強いマルチは、日焼け果などが起きやすいので、白色マルチを使用するか、反射マルチを敷く量や反射程度（古いマルチや裏面の使用など）を調節する。着色

が進み次第マルチを除去する。

- ・下垂枝への支柱やつり上げにより、反射マルチとの距離を確保する。
- ・果実の日持ち性向上のため、収穫は気温の低い朝に行う。

<ブドウ>

- ・日焼け防止のため、クラフトカサやタイベックカサ等を利用する。
- ・日焼けや縮果症等の対策として、高温が続く前に新梢の誘引を見直し、果実に直接日が当たらないようにする。
- ・着色始めの品種では、果房が高温にならないよう、過度な新梢の切除や摘葉を控え、必要以上に棚面を明るくしない。
- ・結果過多園や樹勢低下樹では、早めに見直し摘房を行い、着色向上に努める。なお、玉張りが良好な園では、結果過多とならないように注意する。
- ・新梢伸長が続いている樹は、ベレーゾン期前か着色が全体に回った時期に、新梢先端の摘心と副梢を2~3枚残して摘心し、着色向上と養水分の競合を防止する。

<スモモ>

- ・日焼け果の発生を抑制するため、新梢管理は高温が続く場合は控える。
- ・収穫期に高温が続く場合は過熟果の発生が心配されるので、着色にとらわれず、果実の弾力と熟度を優先した収穫に努める。

<オウトウ>

- ・過熟果の発生が予想されるため、適期収穫に努める。
- ・花芽分化期以降の高温、乾燥は翌年の双子果の発生原因となるため、20~30mmのかん水を定期的に行うとともに敷ワラ等により土壌乾燥を防止する。
- ・ハダニ類の発生に注意し、収穫後も定期的な防除に努める。

<その他>

- ・高温が続き乾燥する場合は、定期的なかん水に努める。成熟期の園では約5日間隔で20mm、果実肥大期の園では4~5日間隔で30mm、収穫後の園では約7日間隔で30mmを目安とする。一度に多量のかん水を行うと果実品質の低下を招くので避けるとともに、収穫5~7日前からはかん水は控える。なお、かん水は気温が下がる夕方等に行う。
- ・樹冠下は敷ワラ、敷草を実施するとともに、草生栽培園では草刈を励行する。
- ・かん水施設等のない園は、SSなどで樹冠下を中心に1樹当たり200~300リットルかん水する。
- ・圃場が乾燥するとアザミウマ類やハダニ類の発生が多くなることが懸念されるため、定期的な防除を徹底する。
- ・この時期は大気の状態が不安定なことが多いため、高温以外にもゲリラ豪雨、降雹、落雷なども視野に入れて、気象情報をこまめにチェックする。

○野菜

- ・健全な生育を促すため、定期的にかん水する。
- ・地温の上昇と水分の蒸散を抑えるため、敷ワラや敷草を行う。
- ・果菜類では、着果負担を軽減し草勢を維持するため、不良果（奇形・変形果等）は早めに摘果し、健全果（良果）は肥大し過ぎないように収穫を適期に行う。
- ・草勢が落ちている場合には、必要に応じて液肥の葉面散布を行い、回復を図る。
- ・アザミウマ類、ハダニ類、オオタバコガなどの害虫による被害が増加することが懸念されるため、発生状況を把握し、発生初期の防除に努める。

<スイートコーン>

- ・果実に萎びが発生しないよう、適期収穫に努める。
- ・雄穂出穂以降から収穫まで降水量が少ない状態が続くと、果実の肥大不足や先端不稔を引き起こすとともに、出荷時の萎び発生も懸念されるため、速やかにかん水を行う。

<夏秋ナス>

- ・つやなし果の発生を防止するため、整枝・摘葉を徹底し、葉面からの蒸散量を抑える。うね間かん水をする場合は、地温が低い早朝か夕方に行い、株元まで水位を上げないように注意する。

<夏秋トマト>

- ・ホルモン処理を徹底し、着果促進を図る。ただし高温時に処理すると空洞果などが発生しやすくなるため、涼しい時間帯に希釈濃度を守って行う。また、カルシウム剤の葉面散布を行い、尻腐れ果の発生を予防する。

○花き

- ・乾燥によりアザミウマ類、ハダニ類などの害虫による被害が増加することが懸念されるため、発生状況を把握し、初期防除に努める。

<施設花き>

- ・寒冷紗などで強めの遮光をするとともに強制換気に努め、葉面温度の上昇を防止する。
- ・かん水は、気温の低い朝夕に行う。

<露地花き>

- ・敷ワラ、敷草等を行い、土壌水分の蒸散防止に努めるとともに、乾燥状態に応じ朝夕にかん水を行う。

○水稻

- ・今後、穂肥の施用時期を迎えるが、栄養不足になると胴割れ粒の発生を助長するので、葉色を見ながら適期に施用する。
- ・出穂後の高温（最高気温 30℃以上、最低気温 25℃以上）は胴割れや白未熟粒の発生が増加し、品質が低下するので、深水やかけ流しかんがいをを行い、稲体を冷やす。

○茶

- ・敷草により乾燥を防止するとともに、定期的なかん水に努め樹勢の維持を図る。

○畜産

- ・良質で消化率の高い飼料の給与、ビタミンやミネラルの補給及び清浄で冷たい水の給与に努める。
- ・高温時は飼料や水が劣化しやすいので、残渣等を放置しない。
- ・健康悪化の兆候がないかなど、家畜の健康状態をよく把握するため、観察の頻度を増加させ、快適性に配慮した飼養管理に努める。

<舎飼い家畜（牛・豚・鶏等）>

- ・飼育密度の緩和、換気扇や扇風機等による送風や散水・散霧を行い、家畜の体感温度の低下に努める。
- ・寒冷紗やよしずによる日除け、屋根裏・壁・床への断熱材の設置及び屋根への消石灰の塗布等により畜舎環境の改善に努める。

<放牧家畜（主に牛）>

- ・放牧する時は、朝・夕などの涼しい時間帯での実施や、日陰林等のある放牧地での実施に努める。飼料作物については、排水不良が懸念されるほ場では、湿害対策のため排水の確保に努める。
- ・降雨により畜舎内の湿度が上昇する場合は、換気や通風を適時実施するなど、畜舎内環境の改善を図り、疾病発生予防及び家畜のストレス低減に努める。
- ・雨水等により変質した飼料は廃棄し、飼料タンク内の点検や飼料庫の換気を行う。

○その他（熱中症対策）

暑熱環境下での作業は、熱中症（熱射病、熱けいれん、熱まひ）を生じる恐れがあり、特に暑さに慣れていないこの時期は危険性が高まるので、次の事項に注意する。

- 気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等の作業時間を工夫する。
- 水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給する。気温が著しく高くなりやすいハウス等の施設内での作業中については、特に気を付ける。
- 帽子の着用や、汗を発散しやすい服装を着用する。
- 作業場所には日よけを設ける等、できるだけ日陰で作業する。
- 屋内では遮光や断熱材の施工等により、作業施設内の温度が著しく上がらないようにするとともに、風通しをよくし、室内の換気に努める。
- 作業施設内に熱源がある場合には、熱源と作業者との間隔を空けるか、断熱材で隔離し加熱された空気は屋外に排気する。

